親 分

何んだ、 八。 た いそうな意気込みじゃ な 4 か、 喧 嘩 でもし

たの か

形平次は気 0 な 11 顔を、 八 Ŧi. 郎 0 方 に 振 り 向 け ま し た

喧嘩じゃ あ りません がね、 癪にさわ つ て 癪 にさわ つ 7

癪なんて b 0 は、 紙入に入れてよ、 内懐にしまい込 ん で置く、

だよ お 前 見 た e s に 鼻 の先 ヘブラ下げて 歩く から、 余計

にさわるじゃ な e s か

ッ、 まる で心学の講釈だ。 親 分も年を 取 つ たぜし

八 五 郎 は 余 つ 程 虫 0 居どころ が 悪 か つ た P 0 珍 親 分

平次に突 つ か か つ て行きます。

を取 ハ ッ つ た ハ ッ ` 知 ハ な ッ、 11 よ。 八五郎にきめ ところで何 付け が ら つ れるようじ た ( ) 癪 に さわ ゃ るん 全く

次 人は無造: P 作さ 笑い 飛ばして、 縁側に後ろ手を突 W いたまま、

0 きっきった。 ラ ク ラ 見入 するよ る う 0 でし な お た。 天気続きで 七夕も近く す。 天気が定まって、 毎 · 日毎

だ って、 口惜 *( )* じ ゃ あ りませんか。 三輪 0 万七親分が、

先

刻

H

昌平橋 であ つ 0 顏 を見ると、 いきなり、 『おや八兄哥、 ح の 辺に

ブ ラ て 11 る ょ う じゃ 相変らず銭形 の ところに 居候 か 俺

ところ 0 清吉 な ん か、 八兄哥より二つ三つ若 い筈だが、 ح 0 間

啞 か ら入 、谷に 世帯を持っ て、 押 しも押されもせぬ 一本立の 御 用

聞

だ

尤もそこまで行く のは容易のことじゃあるま

|

と斯うだ」

でも買おうと思 あんまり 腹が 立 つ た つ か が ら、 番太 e st っそ十手捕縄 の株だって唯じゃ買えねエ を返上して、 番太 の株

腹を立 てて e st る癖に 八五 郎 0 調子には、 吹出さずに

居られない可笑味があります。

は附 だ。 は、 逢 郎 の株を だ 良 つ たら、 けな 田 つ 舎 後家 頃 狙 て立 うのは、 の貸家 か いから ら姪が来て、 そう言 派な ッ、 附きの 一 本 立 があるなら丗話 江戸中 株 ッ、 ってやるが宜 -と言ったような具合にな」 でもある 笑 0 向柳原 御 0 っちゃ 岡 用 つ引 聞 0 の叔母 気 61 して下さいよ、 か Þ に 0 4 親分  $\phi$ 毒だ な 0 の家が急に狭く 11 が、 か。 お前 のところに泊 それ ح 腹を立 ば ん はとも か 家賃な ど三 りだ て ん な 輪 か ょ って る 度に つ 0 た e s 親 か る Ŧ. ら

うん よう それ だね な手柄を立ててよ、 そう 5 機が嫌ん の ح 0 悪 とを言ったんじゃ、 11 虫だね。 お神楽の清吉が目を廻すような女房を貰 じゃ、 三輪 腹の虫が 0 兄哥が、 納まりませんよ」 び つ りする

そんなのはありますか、親分」

納まるま あ りさ、 が、 江戸は広いやね。 大きな仕事ならちょうど良 綺<sub>れい</sub> な 女房 11 0 0 方 が は あ 俺 る ぜ 0 鑑定ながる

「ヘエ」

谷浅草から神田 例えば、 近ごろ三輪 小石川 0 ^ 親 か 分が追 け て二三十軒も荒 e st 廻 て e st る、 痣ざ 人 八間も五 0 熊 言だ。 六人斬 下

5 れ て いる が、どうしても捉まらね エ

通 する 何 ŋ 平 出鬼没で、出賊、金高に の言うのは尤もでした。 て b 捉まりま に 江戸 して二三千両 中の せ  $ar{k}_{\circ}$ 岡 つ もかせ 去年 引が の暮あたり 東<sup>たば</sup> にな いだことでしょ つ か て追 ら風 e s うが、 0 廻しても、 如く去来 文字

赤 な 痣 ぎ そ つは あ る人 あ つ 間な しも心掛けて ん か、 滅 多に  $\epsilon \sqrt{}$ るが、 見付か 首筋 りませんよ」 に 火 0 燃え るよう な真

ます。 賑 風 兇〟 Þ 0 賊ぎ 小気 か は なうちに、 何 0 きい ん 0 変哲 た様子で、 何処ともなく  $\boldsymbol{b}$ な e s たい 小男で、 、逃げう て e s 宵ぃ 黒 せる 0 11 う 覆 面 ちに入 0 が特長とされ を たっ り、 往 き 来が り て まだ 町 ŋ

間 な 痣 P の う あ が ることと、 つ の て 特長は e s るほど軽捷なことです。 それから、 覆面 の下か 恐しく ら見える 手 左首筋に 0 利 く ことと、 小 判 身 形 体 0 真 が 赤

「で、まるっきり見当が付かないのか」

ヘエ 首筋 に痣 0 ある人間さえ見付か れ ば ワケは な i s ん だが」

馬 鹿だな 何時までも、 その気だ から、 三輪 0 親分に嘗め

られるんだ」

平次は 『此子誨に ゆ べ からず』と言 った顔 をする 0 で

けに手蔓もず 引 つ 掛 り b な 11 じ ゃ あ ŋ ま せ W か

訊き く が、 自 分 0 首筋に 真赤 な痣 0 あ ることを 知 5 な 11 間

はあるだろうか」

ŋ せ ね、 鏡 と e st う P が あ る ん だ か 5

赤 覆面 11 痣を隠すことを知らな 顏 を隠して、 人 0 家へ押込も 11 ح はどう いう うと言 b けだ う太い 奴 首 筋 0

な る ほ ど ね

七 だけ言 親 痣 分 に つ W た あ か ら、 目 つ と言 当てに 何 わ ん せる と か 工 捜が しち つもり 夫 Þ の • で、 つ 熊吉 け ようが 熊吉を挙げ は 生 あ 捉 る 5 て見るが だろう。 な *( y* よ。 宜  $\equiv$ 輪 11 れ

エ

立 平次 に なろう は 精 など 11 つ ぱ 11 11 う 0 望みを起 激 励 を す す八 る 0 <u>Fi.</u> で 郎 し た。 で はあ で b りませ な け れ ば 本

りま ま 11 そ 間 つき れ た。 を捜すとな ら り が、 見当 八 <u>F</u>i. が 痣ざ 郎 付 ると、 のある は、 か な 神 人間を捜すのと違 く 田 砂じ 列り な 浅草、 っ て 了 t の 中から石を 下 ( ) ます。 谷、 つ 小 て、 石 つ 川を 選り出すようで、 痣 隈は  $\boldsymbol{b}$ 何 な W 捜 もな 廻

とうとう悲鳴をあげた 0) は <u>Fi.</u> 日目

親分、 馬 鹿 だ な 駄 ア、 目ですよ。 そ んな ح 痣 ع 0 じ な ゃ ( ) 人間 何 年 経 は 江 つ た 尸 中 つ て に 熊吉 多過ぎますよ が

何 処 を つ た e s 捜 し廻 った ん だ

神田 浅草、 下谷、 小 石 川を 円

更け だよ 7 熊 押 吉 引揚 歩 込 江 0 戸 荒 む く げ 0 0 0 る は 町 は て 骨 た K 歩 遠 が は め く 折 木 じ 場 13 と れ 戸 所 ゃ るだろう。 P な ح ば ろ あ 11 か か か り ŋ 番所もある。 狙ら ら来て、 つ 痣 た の熊吉が 0 遅く か なら 泥 宵 棒 な 道 0 そ 具 П ( ) 11 う ば を つ ち 持 は、 か ŋ つ 狙ね 7 自 無 夜 分 駄 つ

娘 な

る

ほど

ね

4

けて見たが 俺 は 痣 0 熊 吉 不 思 0 議 押 な 込 事 ん に だ 本郷 家 ع を真ん 11 う の 中に を、 して扇形に 江 戸 の絵 図 に 拡 面 が 印 つ て を 附

る

痣 0 熊 吉 は本 郷 で は 軒も 荒 7 11 な 11 だろう。 れ は ど

ういうわけだ。解るか、八」

角 はよろず 解 ŋ ま せ 0 ん 事悪 ڕ Ļ それ 火難盗難慎 とも本 郷 は む 暗ん 剣ん 殺さ に 当 と三世 る か な 相 に 11 0 方

無駄 は 止 せ 痣 0 熊 吉 は 本 郷 に 住 ん で 居 る ん だ

「ヘエッ」

あ

る

地元を荒す عَ 足が 付 < ع 思 つ て 11 る 6 だ ろう 探 す な ら本 郷 を

5

搜せ」

「本当ですか、親分」

ノラリク ラ IJ と暮 て ( J る、 金 費 11 0 荒 11 野 郎 を 捜 す 6 だ 悪

銭身に つ か ず ع 11 う く 5 11 だ。 盗 ん だ 金 を 溜 め 7 置 く 泥 棒 は

成程 ね。 あ 9 なん か 盗 んだ覚え は な 11 け れ ど 金 が 身 15 9 か

エ

身 つ 程 0 金 が 入 つ た ع は あ る め 工

「違えねエ」

う 61 だ。 また掛 た 0 を持 ŋ 宵 桟ん け つ 0) うちに を 合 て 切 11 11 新なし ŋ る ` 取 に K 音 違 な つ た 0) る 11 しねえように細工をするのは、 ŋ な 11 か 黙 頑丈な鑿、 な ŋ つ 7 器 聴 用 け な 細 とを 痣 11 0 散目鋸、 熊吉 て 忍 は 雨 道具の良 び 廻し錐、 込むよ 戸 を

そんなものを持って歩く奴があったら容捨をするな」

したり、 吉ほどの腕 る 「それからもう一 0 は熊吉だが、 手に余ると助勢もするようだ。 は ない。 つ、 相棒は外に見張 解ったか、八」 熊吉には 相 つ 棒がある。 て居て、 こい 邪魔 中 つ は ^ 柄は があ 入 つ 大き ると合図 て 仕 事をす e st が 熊 を

て、 そんなことでしょう、 解 金費 りましたよ。 11 の荒い ノラクラ者で、 痣のない人間で、二人組メッジ 親分」 小道具を持 って歩 で、 本 郷 < に 野 郎郎 住 ん で 11

毎晩家をあけることや、 身軽 で 腕達者なことも忘れ ちゃ ならな

\ ∟

「それ だ け 解 って e s れ ば、 捉まえたも 同様ですね、 親

「そんな手軽なわけにも行くまいよ」

マ じ Þ ちょ ( ) と行 って 縛 って来ますよ」

馬鹿だなア」

平次 の言葉を背中 に 聴 11 て、 ガ ラ ッ 八 は ア タ フ タと飛び 出 しま

Ξ

心を引 すが そ れ ガラ から三日目、 れ た ッ 八 0 で の八五郎 す。 痣ぉ゙ の熊吉は相変らず諸方を荒し Ŕ 変なことから、 思 ( ) も寄ら 廻 つ ぬ て お b りま 0 に

11 ても見な は、 あ ( ) れ つ もり ほど平次に注意されて、 のガラ ッ 八が、 本郷お弓町 痣 0 あ る 0 とあ 人間 る屋敷 に は 振 0 り 前 向

え

で、 のあ る人間 に注意を囚えられてしまった のでした

頬か も薄紫色 ば 木 か た り を 5 流 た れ 11 0 る そ が あ 血 れ た 色 は は ŋ 0 に、 十八 良 つきり e s ほ 顔に右 見えて 九 7 の美 の 四 0 e s 文銭ほど 頤 るではありませ 11 の下、 娘 でした。 ふくよか 0 丸い 湯 か ら上 線の、 そ つ

るの た。 る 喉<sup>ど</sup> 吉 で ガ 熊吉 ラ 上に 11 ッ八は ے は左首 0 娘は、 e s 薄 ハ う 紫 筋 ッと立止 証拠見た に、 0 右 小さい の 小 頤の下 判ほど りました。 痣が e st な b あ 0 真 る のだということに 覆面 が、 0 っ赤な痣がある です 一でも冠れ、 次の瞬 間、 ば、 この 気が ちょ と言 痣 付 う わ き は て 熊

が、 力を 色白 感じさせ ガラ の美しさで で、 ッ 眼が の です。 大きく した。 驚 11 た + て、 0 八九 は、 吸 の、 そ 11 寄 0 悲の醜い せられ なよなよ るよう さに 引 な、 た華 立 て 奢立ち 不 ら 思議 れ な う

7

それ ガ は ラ ツ 職業意識だ 0 足は *( )* つ つの た か 間 に そ やら、 れとも浮気心 娘 の 後を だ 跟っ つ けて た か 居 解 ŋ ŋ ま ま した。 せ

「おや?」

あ ラ ッ 娘 0 は 入った か 兀 方 思 0 0 景 は つ 荒 色 た ほ 0 れ 果てた 凄まじさ どです 門 K 0  $\dot{\Phi}$ 驚 で て、 した。 狐 に もう つまま たそがれ た 0 では ガ

ŋ 11 女 が 門 を グ そ そ 中 ル 11 れ IJ そ に は を表 と娘 p 綺 は 麗 を迎えた 0 ŋ な 方 出 しもたや ^ 来 廻ると、 0 のを見て、 良い があ 人 荒れ屋敷 間 つ 0 て、 ホ 娘に ッ と安心 **E**. 0 間 十恰 違い 方はか 好 した心 あ 0 ŋ 召仕 な 持 り らし

でそ 0 П に 看 板 が 掛 け てあ つ て、 『尺八指南 竹斎』 ع めま

す

御免よ」

ガラ ッ八はもう飛び込んでおりました。

どなたでございましょう」

刻裏 の方の家で、美しい娘を迎えたあの老女ではありませんか。 た障子 の蔭 いから、 濡れた手を拭き拭き顔を出 した の は、 先

尺八を稽古したいんだが」

の間、 ガラッ八はそうでも言う外 は あ り ź せ ん

「そう言わずに頼むぜ。 近頃は新しいお弟子を皆んなお断 尺八を稽古 りして なきゃ、 お りますよ」 男が立たね エ

があるんだ。 師 匠に 取 次 いでく

老女は頑なに首を振 りました

者だ。束修はいくらだえ。 「不意に来たからって怪 い人間じ -樽代とかり やね 何んとかあ ェ。 神 田 0 る な 五 ら、 郎 そう 11 う

言ってくれ。 憚りながら

ガラ ッ八は懐へ手を入れて財 布 0 中 の 銭を読みま た。

財布 憚 りながら金に糸目は 中 に 残って いる 0 は、 附けねエ 四文銭がたった六枚。 -』とやるところでした これじゃ ろく が、

な 蕎 喰えません。

, i お六。 折角そう仰 しゃ るなら、 お 通し申すん だよ」

奥から錆 のある男の声が掛りました。

中 ラ は畳建具は言うに及ばず、 · 八 は 肝 ・ うやく通され を潰 しました。 て見ると、 家も外は思 中 床も天井も張り直して、 0 調 度の e st 思 きり荒れておりますが、 11 0 ほ か 立 派 眼の覚める な の にガ

ような清

「尺八が執心なそうで、 及ばずなが 5 御 相 談相 手 に な りま よう。

前々から大分おやりでしょうな」

昧 立派さ、 主人は三十二三、大町人の若隠居が、 ( ) 0 や、 日を送っていると言った様 相対しているガラッ八は、 あ つ しは遊芸が大嫌 いで、 子です。 何んとなく圧倒され気味です。 何んにもや 物言 遊芸に (J 打込ん ったことはありま の柔かさ、 で、 恰幅 贅沢三

螺も吹ける ガラ ´ッ 八 は ( ) 男です。 ツイ正直なところを言ってしまいました。 本当に法

せんよ」

はどうも」

な

主 人の竹斎もことごとく痛み入ります

ところで入門料はいくらでしょう」

られる 言っ ح 「それ た当 世 に は 郎 は 御 り前過ぎることを考えながら斯う脈を引いて見まし の中ではございません」 は 存 及びませんよ。 懐 じ 0 の通 四文銭六枚で足りなか り、 金 どうせ道楽でやっていることで、 があるからと言って、 ったらどう ただで喰 つ て居 ع

者 ような名 主人 締 の竹斎は 目だけでも持 り が Þ 朩 かま 口苦 し く っていなければならなか い笑いを笑い 足 腰 0 達者な ました。 男は、 そ 何 つ 0 た 頃 か は 0 浪人 です。 活っ 計き 無宿

は どうも

ラ

は

もぞもぞしま

文銭

が

か

つ

た

0

良

( J

が 不意に、 こう坐 後ろの襖があ っていると、 いて、 シビレがきれ た。 黙ってお茶を出したも 四 てや 六 枚 りきれませ 助 ん 0 が あ りま

本名は

Ш

城

屋滝三郎

ع

いうんだそうですよ」

す

年増で、 ガラッ 八は 色の浅黒 危うく声を出 1, 目鼻立 すところでし 0 整 つ た 申 た。 分の そ な れ 11 美女が は二十二三 横 0 中 を

「これはどうも、 ^ ッ、 ^ ッ、 **ヘ** ッ ∟

見

せて逃げるように立去

ったの

です。

痣 飛び込んでしまっ ガラ の娘も、 ッ八はすっ 今 0 中 か 年増もこ たことにな り恐悦してしまいました。 の 家 ります。 0 者だとす ると、 先 刻表 全 か 妙なところ ら入 つ た

## 四

八 近頃は火吹竹 0 稽古だそうだな」

平次は早くもそれ を 聴き込んだ様 子でし

ッ、 変なことにな りましたよ、 親分」

と 何が変なんだ。 うじゃ な 11 か、 そ さぞ八 の火吹 竹 Ŧ. 郎 0 師匠には、 0 稽古も精 綺 が 麗な妹が二人もある 出ることだろう

「そんなわ けじゃあ りませ ん が ね

ガラ ツ八 は照れ臭く耳 の後ろばか り 掻<sup>か</sup> 11 て お ります。

申 上 げ た 方 が 宜 ( ) ぜ。 また変な 0 に 引 つ かかる 叔 母

さん の心 配 の種 だか ら

「そんな怪 しげな 0 じゃあ りませんよ。 間 違 ( J もなく 、 大 店 た た な の若隠

が。 道 楽 に 尺 0 師 匠を して i s る んで、 竹 名は竹斎と いうが、

店はどこだ」

Щ 城屋滝三郎?

## 「大阪で」

んだ上方の衆か、 上方訛 りはあるか

りませんよ。 江戸の水が恋 弟に世帯を譲って此方

へ来たというくらいだから」

「妹二人も江戸言葉か」

ヘエー 小さい妹 あ るお雪と いう の が 十九で。

れはよく話しますが、 姉 の方の多与里は二十三だそうですが、

可

哀想に物が言えません」

フーム」

「啞ですよ、親分」

そいつは気の毒だな」

飛んだ良い娘が、 可哀想じゃありませんか。 人は痣があって、

人は啞で」



©2017 萩 柚月

るの ろで、 若 か e st そ 女は *( y* 虫歯 な 金 持 の痛 0 < ć ý せに、 のまで可哀想に見えるんだろう。 尺 八 の 師匠は物好きだな、 弟子はあ

四 Ŧī. 人来るよう です。 門 次、 伊之 助、 三太、 由 松 なん て が

「皆土地の者か」

e s え、 この辺では 顔を見たこともな e s 人間 で

顔も、 八を吹 まア 宜 鼻の下がだんだん伸びて来るから妙さ」 面 e s ` に 出 せ 来 いぜ い火吹竹の稽古をすることさ か、 川柳は面台 白 いことを言うぜ 総領 八 は 尺

「冗談でしょう」

郎 は 平手で ブ ル ンと鼻 0 下 をこき上 一げま した。

ち しをする者は、 [城屋 Þ ところで、近頃は他国者がやかましい。 お 上 の 町所を訊 ^ 悪かろう。 何んとしても目に立つから、 いてくれ、 大阪 へ問 大阪の弟のやって居る店だよ」 い合せて、 ましてそんな豪勢な暮 一応身許を調 気が付 ( ) て黙っ る て居

ヘエ」

ガ ラ ッ は 不 足ら ( ) 顔をして 出 て 行きまし

ラ 育に ッ 八 神 b 田か 相手の う P ら本郷 せず、 いちど行く熱心さですが、竹斎の滝三郎は大して持て余 一日を送って居るような有様でした お弓町 尺八も吹けば法螺も吹くと言 , , , 朝行って昼過ぎに行って、 った気 楽さで、 近頃は ガ

れ 何 薄 b そ な となく見覚えがあるようで、 0 時 な いそれは竹斎の滝三郎です。 は る もう酉刻半近いころ、 時 分 で た。 お弓 町まで行くと向うへ 夏の日もとうに暮れて、 近寄って声をかけると、 行く 男 四方は 紛ぎ

助六や御所 な のころ流行 六法を踏む恰好 の五郎蔵と通うも った風俗ですが、一管 で歩く のがあ 0 は ります。 花 の尺八を腰に差 道 か 5 出 て来 して、 る花 川戸 寛濶

八五 郎 親分、 ちょうど宜 い塩 梅に逢 ( ) ました。 と足違

で出かけるところで――」

ます。太く逞しい一管で、それならば喧嘩道具にもなりそうです。 そう言 いながら滝三郎は、 脇差にした尺八をグイと後ろに 廻し

ここでも話 0 出来な いことは な e st が

せますよ」 たところで、 「まアまアそう言わずに入って下さい。一人で 親分が来て下さればちょうど好い 幸 淋 しい 11 に か 本 ら 出 けさ か け

愛想の宜い滝三郎は、 豪勢な居間に通して、 お 六に 酒 0 用意を

命じます。

のは、 て、 うるさ のところ 他じゃな 他国者は 大阪 いこ へも調 とがな 0 4 みんな身許を書き上げなきゃならない。 が 何処だろう。 べに来る筈だが、 近ごろ浪人と無 < て済むか 町所を言ってくれさえすれば宜 b 知れ あ 宿 者 な つ の しの手から届けて置くと、 · 1 取 締 ŋ 師 が 匠 Þ 0 か 実家と ま いずれ師匠 な 9

郎 0) 言 葉 滝三郎は ハ ッ ع 顔色を 変えまし

「それはわけもないが――」

言 つ 困 ることでも あるの か な、 師 匠

山 [城屋 主 困 人と知 る ほ ど れ 0 ると、 事 でも 江 な 戸 11 には孫店も が 身分 は な 取引 る べ 先も多い 包 で 置

り 0 贅 になる そ 沢 れは暗 な 空 0 気 でし 言 ع 対 た e st 訳 照 でした。 て、 主人の言葉 八五郎 の物を信じ易 の曖昧さが、 い心にも、 大きな謎 の 四<sup>ぁ</sup>たり

て宜 ーそう せ め ( J b 7 0 明 て 上げ か、 日 ま た 悪 で 待 11 11 P が、それが出来な つ のか、 て下さ は *( )* つ きり極 妹達とも *i y* ° めましょう というの 相談 て、 は 師 身 分を 匠 明 知 2

て

の

通

り、

あ

つ

は

御上

0

御用を承わるものだ」

今にな 丘 りすると、 K 費 師 つう金 匠 の暮 って が ど こ どんな疑 う 向きの派手な つ か か 5 り素姓を隠したり、 出 いを受けるかも解らな た か のが、 銭形の ツイ人の 親 分も変に 金 ・噂に上 の出所を言わなか ( ) が、 思 宜 って、 って居 いだろうな この る のさ。 暮 った 師

14

P 人 1 の美しい れ だけ 妹 0 が、 事を教えてやる気に 隣 で息を殺 して 居る な つ た の を感ずると、 の です。 八 Ŧi. 郎

五

て下 さ e s ゃ 八 言 £. 11 郎 憎 親 61 分 ことだ が 何 b か b ち明けま ょ う。 聴

ただし う な錯覚を起させます。 滝三 夏 宵 郎 0 は 0 さえ 竹斎 ま だ 薄 は この 明 膝に手を置 る 家 軒が、 外を いたまま、 通る人 十 重二十重に取囲まれているよ の跫音 ッ が、 と耳を澄しました。 何 ん とな

竹 斎 は 続 け É した。

0) 家 は 慶安 の春、 謀叛を企てて御処刑 にな つ た、 丸橋忠弥 0

道場 0 跡だ

ッ

0 床下に穴蔵 ますが、この敷地がそうとは、 私 丸橋忠弥 一味が隠 がこの 家へ入ったのは のある の道場が したもの のを見付け、何心なく入って見ると、 か、 お 弓町にあった事は、 中には千両箱が三つ」 一年前。 八五郎思いも及ばなか 11 ろ いろ修覆して居るうちに 語り伝えに聴 つ たのです。 由井正雪 (J て居 ŋ

八五郎 もあま りの 奇怪な 話 に 口を緘んでしまいました。 そこは凡夫の浅ましさで、

さっそく

屈

出

るつも

りで

いたが、

を見ると のは全く 今では半分ほども、 の つ 出でたら 4 フ 目,b ラ フ 私は 費ってしまいました。 ラとした心持になり、 やは り江戸 の生れで、 大阪 五両費 唯 の山城屋と言った の 11 尺 八 十両取 0 師匠竹 り、

斎 相違ござ ( ) ませ ん

「穴倉 の中 に はまだ二千両近 ( ) 金が 残 つ て 居 ります。 そ れ をそ

分 に 差 上げま しょ う、 さア」

これ はど の重大事を、 何んの蟠りもなく言 つ て のけて、 滝三郎

は 手燭を 取 つ て先に立ちま した。

後 か ら二三歩廊下 ^ 出た 八 Ŧ. 郎

後ろからそ つ と袖を引く 者が ある の です。

金

て、 振 ŋ 返 八 Ŧi. る と小 郎 を 拝 さ ん 11 で 妹 11 る 痣ざ で は の ある あ ŋ ませ お 雪が、 ん か 泣 き出 しそうな 顔 を

P は わ 兄 の け Ŧi. 滝三 郎 <u>F</u>i. は 郎 が 行 郎 危 ほ きませ を ど 11 と言 助 0 男 け ん bう て < 0 か、 れと言 恐 そ 11 予 れ う 感 は の 判 にゾ か りま そ ッと身 せん れと 内の が、 顫 と 穴 え に 倉 を P ^ 感 か 行 つ に て

そ う 待 0 わ 儘 け 9 に 7 は < て 行 れ お か 師 ね 丘 11 てく 工 0 れ 明 そ 日 11 改 つ め は て 俺 貰 が 11 貰う に 来 に る し か 5, 7 b ح 今 晚 す ぐ だ け ع は 61

お 雪 0 物 悲 11 瞳 に 引き 摺ず ら れ るように、 八 五. 郎 は 出 0 方 ^ 外

れました。

「本当に貰って下さるか、八五郎親分」

宜 11 ح P ` 二千両 ح 連 纏 ま れ ば 何 んか 0 足 に な る だ ろ خ

何

か

の足

どころ

では

あ

り

ませ

٨

そ

0

時

分

0

千

両

は

今

の 二 千 万 円 に P 通用する で しょう。 八五 郎 な ど は 生 0 う ちに

度も お 目 に か か ること 0 出 来 な 11 大金です。

「見るだけなら――」

ょ

11

ع

見て下

さ

11

親

分

0

怯 لح 思 わ れ たく な 11 で ぱ 11 0 八 五 郎 は、 滝 郎 0 後 か ら

物置の床を剝いで、暗いだんた穴倉の入口に引返しました。

て、 て、 ん だ 道 置 つ 0 開 床  $\mathcal{H}$ そ を け 9 重 る れ ね を ح 11 <u>-</u> <u>-</u> <u>-</u> <u>-</u> <u>-</u> . 中 で、 た 箱 は 間 暗 が 四 あ 行 畳 11 だん り 半 つ ま た ほ だ す ど と 6 0 ろに 黴が を 下る 臭さ 樫し 11 穴倉 ٤, の朽ち果 中 は 方 7 石 た ع 隅 屝 材 が 木 あ で 畳 つ

啞 0 通 り 二千 両 く ら 11 は あるだろう。 ح れ は 皆 ん な 親 分

0

P

事 だけ 持 は 内 つ て行きなさるとも、 々 に て下さい 頼 ここへ みますよ、 預か 親 るとも勝手 分 だが、

箱 0 中 か ら、 山 吹色も真新 ら し e st 小 判をザクザ クと 掬け 11 あ げ て

滝 郎 う は 11 ちど 拝 む の です。 <u>Ŧ</u>. 郎 0

さ 11 て来 たお 0 雪は、 です。 大きな 袖 眼 を 引 パ 1 0 0 悲 みを湛えて、 振 ŋ 返 る ع 八五郎を ま で 跟っ

## 六

分、 驚 11 た 0 驚 か ね 工 0

五郎 は 息せきき つ て 平 次の 家に 飛 び 込 みまし

どうした、 八?

で すよ、 親 分。 ちょ 11 来 て 下さ 11

何をあ わ てる んだ。 お前があんま り尺八 に 凝こ る か ら、 先刻

下 9 引 の辰を跟っ けさせ たが `` 逢 つ た か

辰 に 逢 つ て、 お 亨 町 0 家を見張 5 せ て 来ま 何

しろ小 判 で二千 両で しょう。 ( ) や驚 かねエの

俺 の 方 が 驚く ぜ、 尺八 に憑っ か れた り、 小 判 に 憑 か れ た

ず 聴 て さ ( ) ょ 親 分。 斯う だ

を を訊 うと ガ ラ ガ か ラ ッ て た ッ 7 経緯は 竹斎 は る に二千 夕方か 知 0 滝三郎が わ つ て、 らの け 両 ても 0 事を詳れ 袖 観 妹 面 0 下を摑ませ、 した 喰 のお雪が・ つ しく た様子、 b話 の か、 しました。 兄 を 庇 上役人 事 丸 件 橋 を 忠 う ゥ Þ の 大 弥 ヤ 銭 阪 か 0 形 厶 穴 0 平次 実家 ヤ 倉 八 <u>F</u>. させ 郎 が 0 内

Ŧi. 身 そ 郎 e s 0 を心 つ は か 大変だ。 ら聞 配するの 何んだって滝三郎を縛らな 尾鰭が付いて、 涙を流さんば なかな かりに拝んだ話まで か に面白 かった くなります。 ん だ

丸 橋 忠 弥 0 穴倉から金を出して費 へった廉っ で縛るんですか、 親 分

で掘 馬 り返 鹿 だ な した筈だ。そん ア、 丸腰忠 弥 な 0 穴倉な 道 場はとう ん か 残っ の 昔 に て 居る 取 潰 P して、 のか、 床の そ ま 9

は 盗 み 溜 め た金 一に決 つ て ( ) る じゃ な 11 か

「盗み溜めた?」

滝三郎 と いう奴は、 痣ざ の 熊吉 か、 そ の 一 味だよ。 さア、 案内

ろ、俺が行って見る」

痣 の 熊 吉 は、 左首筋に 赤 11 痣 のある 小 男 で ょ う。 郎

はホクローつない大男ですよ、親分」

そん な 事はどうだ つ て都合が付くよ。 こうし て 居るうちに、 ず、

らか つ た らどう する んだ。 さア、 来い、

「だって親分」

は、 す 11 つも 雪と は 多与里姉: 猟犬の よう 妹 に 0 勇む 平 和 な 八 生 Ŧ. 郎 活を驚か が、 \_ す の に 足も三 忍 び な 0 足 か b 9 踏る む で 0

併か 親 分 0 平 次 が 行 < 0 を、 八 <u>F</u>. 郎 は 引 止 め よう は あ ŋ せ

んでした。

「辰、変りはないか」

お弓 町 に 着くと、 竹斎 0 家 0 前 に、 番 犬 の よう 頑 張 つ 居 る

「何んの変りもありませんよ、親分」

下

辰

に、

平

次

は

声

を

掛

け

ま

「出た者も入った者もないだろうな」

エ

さ ア、 八 威勢よく 吅 ん だ。 辰は 裏 ^ 廻 れ、 人 b 外 出

すんじゃ いよ

ヘエ」

平次は 八 <u>Fi.</u> 郎 吅 か せました が、 何時まで Þ つ て 11 て Ŕ 中 か

らは返事もなく、 開 け てくれる者もありませ  $\bar{\lambda_{\circ}}$ 

戸を打ち壊せ 構わな いとも、 後は俺が引受る」

ょ

平次の気組 に 励まされて、 八五 郎はでっかい身体をドシ ンと雨

戸 に叩き付けました。

は 何 ん の変哲もなく、 の骨折で、 ります。 どうやら斯うや 彼方此方に灯さえ点いて人の気配もなく、 ら 雨戸 を 押 倒 して 入 ると、 中

穴倉 ^ 案内 更け

7

お

ヘエ」

物置 へ行 つ て 見ると、 床は 剝は ( ) だまま、 灯 0 用意をし て 無気 味

な 中 へ入ると、 穴倉 の 樫<sub>し</sub> 0 戸 0 ところへ、  $\boldsymbol{b}$ う プ ンと生 皿 臭

11

あ つ、 遅 れ た か

差し 出 した 灯 0 中 に、 鮮 血 に 染 ん で 斬 ŋ 殺 され て 11 は、 思

いきや、 主人 0 竹斎こと滝三郎 0 無残 な姿です。

あっ

八、 小 判 は 無 な つ て 4 る はず だ。 見 てく

ありませ 6 ょ、 親 分

穴倉 0 隅 0 箱は空っぽ、 八五 郎は呆気にとられ て居るば か

狭 い穴倉の中で、 良い手際だ。 これ程 の男も、 声を立てずに

死 ん だろう」

調 居 度 穴倉から出て奥 ります。 0 中に 姉 娘 0 0 多与里は、 部 屋 ^ 行 く 滅茶滅茶 ٤ 平次 に縛ら が 想像 れ た てお 以 上 つ 転 0 がされ 贅 沢 な

あ、 多与里さん 7

ア、 ア、 ア

近寄る八 五郎 の 顔を見て、 啞 娘は 涙を流 すば か  $\mathfrak{h}_{\circ}$ 

「待て待て、八、 そ 0 縄を解 11 ちゃ ならね エ

平次は近寄ってよくよく 縄 の具合を見た上、 静 か に 解 11 て Þ ŋ

ました。

お雪とお六はどうしたで しょう、 親 分

「心配するな。 裏の方 の家で顫えて居るよ」

って見 て来ますよ

妹娘 飛んで行 の した。 お雪は、 つ たガラ 婆や ツ八。 0 お六と真っ蒼になっ 其処には平次の予言に て、 唯うろうろして居 少しも違わず、

七

八、 こい つ は お前 0 手柄だ。 よく 落着 ( ) て考えろ」

ヘエ

馳 け 付 けさせて、 平 次 け た近所の衆を、 は お 雪、 さて改め 多与 里、 て八五郎 町役人と番所と、 お 六 の三人 に斯う言うの を下 土地 つ 引 で 0 0 御 辰 た。 用 に 聞 見 張 0 ところへ 5 駈

吉 まず、 Þ が つ 盗 て み あ 溜 口を塞ごうとした」 の穴倉 め た 金 だ の金は、 ろう。 丸橋忠弥の遺 そ れ を滝三 した金じゃ 郎 は 折端端 計でま エ つ て 痣 お 0 熊 前

「ヘエー」

置 マさ加減を見て、 ぉ 表を見張らせて 前 殺 ちゃどん して ع いう な失策 お前 間 痣゙ぁ゙ e s に 0 る。 。 やると言 をやらか 0) 正 熊吉 直 さを ほ は ん す 0 つ 腹を立 知 半 た か 5 刻ほ 解ら 金を な て か た。 どの 隠 な つ た 11 間 ع ح て 0 了 思 ん だ。 のことだ」 な つ つ た。 た 相 そ 棒 か 0 5 滝三 そ を 生 れ 郎 は か ع して 0 思 辰

お に は 見 当 が 付 か な ( J か 痣 0 熊 吉 は 誰

「滝三郎ですよ、親分」

「どうして滝三郎が痣の熊吉だ」

0 て そん で、 ( ) た尺八 な 中 男 に つ は、 散り 気 P あ 目め が . 据っ あん る な だろう。 ع 11 鑿みと ま り太すぎると思っ Þ 廻 あ し錐り りませ さ が入って居ましたよ」 れじゃ滝三郎を殺 6 か た そ 5 れ に こい 滝 した 郎 9 は 0 0 腰 仕 は 掛 け だ

0 穴倉 あ 奴、 の中 であれ ほ そ ど 0 の 紙 業さ の 0 出 中を見ろ。 来る奴。 女持 小 柄 で、 可愛ら 首 筋 に 真 品 赤 な

「ヘエー」

中

は大変な

P

のが入

って居る筈だ」

٤, 0 裏に 畳 粉白粉と、 0 は、 に 落 べ ちて ツ 万能膏 1 リ膏薬が付 11 た の貝と、 赤 11 羅りし 紗ゃ 小判 ( ) て居るではありません 紙 形 入を 0 赤い 開 、 呉z 絽s け る の布と 小 菊 か そ 枚

おどろく八五郎、間髪を容れず、

「熊吉、御用だッ」

部 屋 平 次が 0 灯 が 喝を喰わ、 消え るのと、 せる 下 の ٤ つ引 の 巨大な赤い鳥 辰が悲鳴をあげる のパ ッと飛ぶのと、 のと一緒でし

た。

幸 平次と八五郎 八、 *( )* 平次 の月夜、疾風 曲者は外へ 心咤につ 0 狭めて行く輪 の如く逃げ廻る曲者は、 れて、 逃げた。 八 五 お前は表へ行 0 郎 中に入ります。 の身体は 猟犬 け、 次第に逃げ路を失って、 俺 の よう は裏 に か 動 5 きます。 廻る **ッ** ∟

「八、気をつけろッ」

言う間もありません。

脇差がとんで八五郎 の眉 間 へ来る のを、 か わ すの が 精 11 つ ぱ 11 22

野郎ッ、神妙にせいッ」

無む か 手ず 頤と らは久し振りの銭が飛びました。 二た太刀目が と組み付 こ、掌を打· でのひら W たの たれ 八五郎の咽 です。 ひるむところを、 「喉笛を を狙 二つ、 って来る前 力自慢 三つ、 の八 に <u>Fi</u>. 五 銭形 つ、 郎 が 平 曲 者 次 は か 0 手 6 額

X

X

痣 熊吉 が ` あ 0 年 増 女 0 多た /与里とは 気 が 付 か な か つ た。 驚 11

たね親分」

に 埒が済ん 貰 て、 で す か 5, つ か ガラ ŋ 好 ッ 11 心 八 は 持 に 今度ば な つ か て 居 り る 九 分 0 通 で り自 た。 分 0 手 柄

た。 俺も 判らなか 良 い男は女に化けられるだろう ったよ。 だが あ 0 家は が、 最 初 声だ から け 怪 はどうするこ 11 ع は 思 つ

ょ

気 P る ع 証 を 0 拠 出 つ だし 来 け む ず て な 見て *(* ) か 啞ぱ 居ると、 11  $\boldsymbol{b}$ に な 0 だ。 つ 物音がする度に、 て 居る 多与里は の は面白 随 分 e s 上手 瞳 考えだが、 が に 動く。 化け ては 偽 耳が聞え 居たが、 e st う

な る ほ ど ね

体 じ 縛 瞳 Þ 9 は た が どう 結 動 11 か び < 目 の 7 は は 本 も女で 非力な女だ。 そう思うと、 人 は な 気が いよう 付 お雪かお六に か 女に化けき なところが な か つ た ろう。 つ Þ あ て る 居る 5 せたと が そ 直 多 れ 与 ぐ か 5 里 わ か あ る 0

多与 里 0 縄を 解 いた平次は 何 も彼も見抜 ( ) て居 た 0 で

な る ほ ど ね

ま た 頤 赤 ع 4 0 術で 判 下 11 痣ざ に は つ 思 た 小 は よ。 最 さ 4 付 初 11 薄 手 か か ら 存<sup>と</sup>a な 近 紫 0 0 11 痣が とこ P え 物 の だ あ ろに手 ح る 判 لح つ 聴 た 本 が が 11 て、 なけ お 熊吉 前 れ ば 0 な は 口 そ か か な れ ら を か お そ 手 雪 本 0 な に 右 0

お 雪 は ど う な る で よう。 熊吉 0 隠 し た二千 両 0 隠 を 教

え た 0 は あ 0 娘 で す が 親 分

ま お前 *( )* 気 は そ 0 毒 れ だ ば が か 在 り 心 所 配 0 遠 してい 11 親 類 る が ^ • 帰 熊 す外 吉 は 0 あ 妹 るま Þ ど 11 う ょ に b あ な 0 娘 る

は 何 P 知 5 な か つ た 6 11 が

そ れ K 私 を 助 け て < れ ま た ょ

雪 込 は れ ガ 兄 ラ たことで で、 妹 ッ 八 で どう は す そ が か れ う。 滝三 しよ が忘 う 郎 れ 5 ع は 赤 れ た な 0 0 他 か を、 つ た で どん 0 そ で す。 な れ に が 骨 穴 熊 を 吉 倉 折 0 ^ 多与 八 つ て妨が  $\mathcal{H}$ 郎 里とお を 誘<sup>さ</sup>る

「お前のいうのも尤もだが――」

平次は考え込みました。 兇賊痣の熊吉の妹では、まさか八五郎

の女房にはなりません。

い記憶を焼きつけてしまったのです。

「りますく
」がある。
「からして八五郎は、一世一代の大手柄に、 拭えども消えぬ悲し

24

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「オー ル讀物」 昭和十六年八月号 文藝春秋社

底本 「錢形平次捕物全集」 第六巻 河出書房 昭和三十一年七

月三十日初版

編集・発行 銭形倶楽部



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/